断章
旭川のアイヌ語地名研究
176
高橋 基

―十勝連峰のアイヌ語地名―

今回からは、十勝岳連峰のアイヌ語地名の山々を見ていきたい。旭川市から十勝岳連峰を見ると、最も左側に、男性的な切れ込みの鋭い秀峰が、オプタテシケ山である。すなわち、オプタテシケ(o p-ta-teske 槍が・そこで・はねかえった)と言われる有名な伝説の山である。その伝説からみていこう。

ここでは、更科源蔵著の『アイヌ伝説集』(昭和四十六年、北書房刊)で紹介する。

「オプタテシケと阿寒の争い」

大雪山系の尖峰オプタテシケ(槍がそれるの意)は男神、釧路の雌阿寒は女神で夫婦山であったが、喧嘩別れをして女神は児を負うて釧路へ帰ってしまった。そしてその怨みをいつかはらそうと時を待っていたが、或るとき持っていた槍を遥か雲間に聳えているオプタテシケに投げつけた。それを見て十勝のヌプカウシヌプリ(原野にある山の意)の神が急に立ちあがって、飛んで行く槍を押さえようとしたが、及ばず耳を削られてしまった。そのため槍はオプタテシケに届かなかったが、それを知ったオプタテシケは腹をたてて、その槍をとってて阿寒に投げ返したところ、雌阿寒の真中に当り大怪我をさせた。今も雌阿寒から硫黄が出ているのは、その時の傷跡から流れる膿であるという。

なおヌプカウシヌプリの起きあがったあとに、水のたまったのが然別湖で、槍のために削り落とされ飛んだ耳が、現在の芽室町のポネオプタプコプ(小さい瘤山)になったという。(吉田巌『アイヌの伝説について』)

また一説には、オプタテシケではなくて石狩岳で、別れて帰った雌阿寒岳に腹をたてて石狩岳が槍を投げつけたところ、雌阿寒岳の耳を疵つけてしまった。そこで雌阿寒岳が怒ってその鉾を投げ返したが、その勢いがあまりにも激しく石狩岳が危くなったとき、ヌプカウシヌプリが駈けつけて鉾を打ち落としたので石狩岳が助かった。それ以来ヌプカウシヌプリは偉い山として、アイヌの尊敬を受けるようになった。そしてヌプカウシヌプリのもと立っていたところが沼になり、然別湖といわれるようになり、石狩岳から受けた雌阿寒の耳の傷は化膿して、今も硫黄になって流れ出ていると言うのである。(安田巌『十勝地名解』)

もう一つも前の二つと大体同じものであるが、石狩ヌプリと雌阿寒とは夫婦山であったが、雌阿寒が浮気をして、石狩ヌプリを嫌うようになった。或る日雌阿寒岳の髪飾りである樹木が大変乱れていたので、石狩ヌプリは非常に怒って、雌阿寒岳を打とうとしたところ、雌阿寒岳は真っ赤な炎の息を吐いて挑戦して来た。そして二つの山はお互いに譲らず、何日もの間黒煙をあげ紅炎を吐いて物凄い争いを続けた。しかし、石狩ヌプリが劣勢となり、これを見ていた親友の十勝岳が加勢して、石狩ヌプリを救った。雌阿寒岳は遠く釧路に逃げて阿寒山になった。十勝岳の元いた所は、然別湖になったという。(近江正一『伝説の旭川及びその付近』概略)

秋月橋から十勝岳連峰を望む

(アイヌ語地名研究会幹事)

※毎月第一週号に掲載します